

村史こぼれ話 23

(後編：敗走する久左衛門)

北越戊辰戦争は、慶応4年(1868)6月以降、こう着状態おちあいに陥ったが、7月25日新政府軍が新発田藩の手引きで、領内の太夫浜・松ヶ崎浜に上陸すると、同盟軍は腹背から新政府軍の攻撃を受けることになり、29日長岡城が再陥落し、一斉に敗走を開始した。

雄次郎ら博徒兵も八十里越はちじゅうりごえを通して会津へ逃れた。8月2日、新政府軍に属する方義隊ほうぎたいが観音寺村の雄次郎宅や、その弟の走出村庄屋龍太郎宅に放火。翌3日には、龍太郎の身柄を確保し、尋問のうえ斬首した。4日、観音寺村・麓村で徹底した家宅捜索が行われ、雄次郎が隠匿いんたくした鉄砲・鎗やり・長刀ながなた等多数の武器類が押収された。雄次郎ら47人は9月12日土湯つちゆ(福島市)口から戦線離脱し、すでに新政府軍に降伏していた米沢藩の荒井村陣地へ出頭し、降伏を申し入れた。米沢藩は、その場で、雄次郎らから銃器・刀大小をすべて取り上げ、武装解除のうえ、矢嶋田村(福島市)へ移し謹慎させた。12月になり、雄次郎らは越後へ送られ、寛大な詮議をもって釈放されることがきまり、翌明治2年1月、それぞれ郷里に帰った。

ところが、明治4年(1871)1月、雄次郎が突然逮捕され、信州中野県へ連行される事件が起こった。これは、明治3年12月19日から21日にかけて、中野県に発生した大規模な世直し一揆とのかかわりを疑われたためで、雄次郎への尋問の結果、全くざん言によるものと分り、4年2月2日雄次郎の身柄を与板藩に差し戻す命令が出された。

その2年後、明治6年、雄次郎は観音寺村で48歳の波瀾はらんの生涯を閉じた。